

### 3 博物館事業の記録

#### (2)常設展示

#### ■自然

##### ◎自然常設展示の概要

自然常設展示は、地学分野と生物分野で構成されている。

地学分野では、まず地形地質模型によって鳥取県全体の大地の概要が示される。そしてその大地の成り立ちを、日本列島の基盤の一部となる岩石(古生代～中生代前期)や日本海形成期の動植物化石(新生代)など、時代ごとの主要な岩石・化石標本を用いて解説している。

鳥取県の代表的な自然景観として鳥取砂丘をとりあげ、その地学的特徴を紹介。地層の剥ぎ取り標本や地形模型、解説映像といったものを用いて、鳥取砂丘の特徴や成り立ち、風紋など微地形の生成要因を解説している。

化石については、鳥取県を代表するものとして新生代新第三紀中新世(約2300万～530万年前)の地層から産出した鳥取市国府町宮下の魚類化石、同市佐治町辰巳峠の植物・昆虫化石、日南町多里の海生生物化石といった標本群に加え、山陰沖海底から引き揚げられた第四紀更新世末期(約3万年前)のナウマンゾウをはじめとする大型哺乳類化石などを展示し、太古の鳥取および周辺地域における生物相の一端を示す。とくに宮下の魚類化石群および辰巳峠の植物・昆虫化石群は、それぞれ複数種の新種が記載されており、全国的にも重要なものである。また地球生命史の解説において、各地質年代を特徴づける国内外の実物化石や化石レプリカを展示し、7景のジオラマとともに生物の歴史を概観できるようにしている。

岩石・鉱物については、鳥取県内でかつて操業されていたおもな鉱山とそこで産出されていた鉱物について展示している他、平成28年に選定された鳥取県の「県の石」と日本の「国の石」を実物標本や写真を用いて紹介している。また分類展示として、片麻岩や日本式双晶(水晶)など県内外で産出される代表的な標本を展示しており、紫外線ライトを用いた蛍光鉱物の発光実験の展示も行っている。



地学展示室の概観。手前に地形地質模型やナウマンゾウ骨格レプリカが見える (R5年撮影)。

R5年時点の地学展示室。上から鳥取県の大地のおいたち、鳥取砂丘の地学、鳥取市国府町宮下の魚類化石、生物の歴史ジオラマ7景。



生物分野では、鳥取県の自然を特徴づける動植物の標本を展示している。

中国山地の自然の象徴的な生物であるオオサンショウウオについて、生きた個体の飼育展示の他、クイズ形式の解説や生活史を紹介する映像、液浸標本の展示がある。この液浸標本は日南町の個人宅で飼育されていたもので、全長143cm、死亡時の体重44.3kgもあり、本種としては世界最重量級の個体である。

鳥取県の特徴的な自然環境として、鳥取砂丘および大山をとりあげている。鳥取砂丘では砂と風がもたらす特異的な環境下でくらすインコモリグモ(クモガタ類)やコウボウムギ(植物)などについて、大山では標高に応じて動植物の顔ぶれが変化する様子について、実物標本やレプリカ、拡大模型、生態写真などを用いて展示している。また中国山地の典型的な自然環境について、樹木のレプリカや鳥獣類の剥製を組み合わせたジオラマにより紹介している。

日本海のユニークさを物語るものとして、鳥取県沿岸に漂着した大型海洋動物を展示している。ダイオウイカ液浸標本は昭和63年に岩美町城原海岸に漂着したもので、全長約7m、左右の触腕がほぼ無傷でそろっており、本種の標本としては国内最高クラスの保存状態を誇る。また日本海を代表する鯨類オウギハクジラ雌雄2体の全身骨格の展示もある。

鳥取県における動物の地理的変異の展示では、ザトウムシ(クモガタ類)やフキバツタ(昆虫類)など中国山地で興味深い地理的変異を示す事例について、実物標本や拡大模型とともに紹介している。

分類展示として、鳥取県で見られる魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類、昆虫類、軟体動物(貝類およびイカ・タコ類)、甲殻類(カニやエビなど)、海藻類、維管束植物、キノコ類について、生態や分類等にまつわるトピックスとともに解説している。



ダイオウイカおよび漂着動物(H25年撮影)。



R5年時点の生物展示室。上からオオサンショウウオ液浸標本および飼育水槽、鳥取砂丘の生物、中国山地の動植物ジオラマ、鳥取県における動物の地理的変異。





開館間もないころの常設展示室。上段左から：大型地学標本と生物の歴史ジオラマ(S51年撮影)、各地質時代を代表する化石(S56年撮影)、東郷温泉の湧出機構(S56年撮影)。下段左から：鳥取砂丘の生物(S51年撮影)、鳥取県の野鳥(S56年撮影)、オオサンショウウオ飼育水槽と中国山地の動植物ジオラマ(S59年撮影)。



大山の生物展示の変遷。上からS55年、H元年、R5年。

### ◎自然常設展示の変遷

50年前の開館当初の自然常設展示は、基本的な展示趣旨としては現在と大きく変わるものではない。すなわち地学分野では鳥取県の大地の概要とおいちを示すとともに、鳥取砂丘や大山といった主要なスポットの地学的特徴を解説、そして県内外の代表的な化石・岩石・鉱物標本を紹介する。生物分野では鳥取砂丘や大山、中国山地の動植物の特徴を示し、オオサンショウウオの解説、そして主要な生物分類群について分類や分布、生態を紹介する、という構成である。中でも鳥取県の地形地質模型や生物の歴史を示すジオラマ7景、中国山地の動植物ジオラマ、オオサンショウウオの飼育展示は、機器の交換や修復、外装の更新などを経てはいるものの、ほぼ変わらない形で現在まで続く展示となっている。一方で当時の展示では、温泉の地質の特徴や湧出機構、ウラン鉱など、人のくらしや産業と関わりの深いテーマにも重点が置かれていたのが特徴である。

昭和62・63年度には、開館後初めてとなる全体的なリニューアルが行われた。音声解説装置やレーザーディスク等視聴覚機器の導入に加え、小型水生生物の飼育展示、水辺環境の動植物のジオラマ、ナウマンゾウの全身骨格レプリカの展示といったものが新設された。

昭和63年にはダイオウイカ、平成4・7年にはオウギハクジラといった大型の海洋動物が漂着し、それらを標本化したものが展示に加えられた。また平成9年度から3年間、剥製標本製作事業が実施された。阪神淡路大震災によって展示室内のホルマリン液浸標本に対する懸念が高まっていたこともあり、カマイルカやリュウグウノツカイなどホルマリン液浸標本として展示されていた標本の剥製化が積極的に進められた。

平成9年度にはタッチング標本を常設展示に導入し、タヌキやキツネ、キ





第1回リニューアル後の展示室。上からゾウの進化、レーザーディスク(S62年撮影)、ナウマンゾウ全身骨格レプリカ、ダイオウイカ液浸標本(H元年撮影)。



第2回リニューアル後の展示室。上：漂着動物、下：海藻等の分類展示(H18年撮影)。

ジといった身近な鳥獣類の剥製を来館者が自由に触り、感触を体感できるようにした。平成15年には「みて・さわって・調べよう」コーナーを新設し、タッチング剥製に加え透明樹脂封入標本などハンズオン形式の展示を充実させた。なおこれらは、令和元年から世界的に流行した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対する感染拡大防止のため、令和2年度から中止となっている。

平成16・17年度には2回目となる展示室全体のリニューアルを実施した。解説パネルや参考写真等を壁の全面に配置して展示室全体を明るく親しみやすい雰囲気にするとともに、分野ごとにテーマカラーを決めてパネルやキャプションの色を統一させ、理解しやすい展示を心掛けた。「鳥取県における動物の地理的変異」コーナーを新設し、鳥取県の自然の特徴をより際立たせた。それまで液浸標本により展示していた爬虫類・両生類の標本を、精密レプリカに差し替え、生時の色彩を含めて観覧できるようにした。

平成24年度には、老朽化したダイオウイカ液浸水槽を新しいものに交換した。水槽の亚克力壁を厚く頑丈なものにし、標本の支持板を透明にして裏側から観察できるようにするとともに、架台を高くしてより迫力のある展示にした。またダイオウイカ標本を取り出した際に触腕のレプリカを作成して学習に活用できるようにした。

平成28年に日本地質学会が「県の石」を、日本鉱物科学会が「国の石」をそれぞれ選定したことを受け、それらを実物標本や写真で紹介する展示コーナーを設けた。令和2年度には鳥取県にあった鉱山と産出する鉱物についての展示コーナーを新設した。

令和2～4年には、当館職員が新種として発見・記載した昆虫ヒョウノセンヒメハナノミについての特別展示コーナーを設けた。



「みて・さわって・調べよう」コーナー(H16年撮影)。



ダイオウイカ液浸水槽の交換作業(H25年)。



## ■人 文

### ◎歴史・民俗展示室の概要

当館の歴史・民俗展示室は、現在の鳥取県域の旧石器時代から近現代の歴史事象と、同域の民俗事象を展示紹介している。職員の専門性から、考古(鳥取県のあけぼの、弥生時代、古墳時代)・歴史(古代～中世、近世、近現代)・民俗分野というふうに分け・分担している。

まず、導入として歴史年表によって日本と鳥取県の通史が示される。現状は、「前40,000年頃、日本列島に人が住み始める」から「2011年、東日本大震災」までの事項である。年表は、昭和47年の開館当時は入口に向かって左側壁面にあり、昭和の終わりには、その下方に鳥取県の文化財(国指定、県指定のもの)の分布地図も設置された。平成25年度の展示替え以降は、来館者が入口に入って右に導くよう、曲面をつけた年表に更新している。そして最初の展示物は、「子持勾玉」など、国指定重要文化財といった本県を代表する文化財を展示している(指定文化財は公開期間が定まっているため入替を行う場合あり)。

考古分野では、弥生の王国を象徴する青谷上寺地遺跡と妻木晩田遺跡の紹介、重要文化財長瀬高浜遺跡出土埴輪(湯梨浜町教育委員会所蔵)を展示する。古代・中世では、国宝三仏寺奥院「投入堂」模型と国重要文化財木造蔵王権現立像(複製)を紹介、近世では博物館が所在する鳥取城跡(国史跡)や鳥取藩の歴史を解説している。近現代では、廃藩置県や鳥取県再置などを紹介している。

常設展示の内容は、鳥取県に始めて来たような観光客にも好評であるが、鳥取市内をはじめ県東部の小学生の社会科見学の要望が多い。特に小学校3年生の社会科で「かわってきた人々の暮らし」の単元があった平成年間後期は、秋から冬にかけて、復元民家コーナーの展示解説依頼が多くあり、日々複数の学芸員で分担して一日中解説をすることもあった。

### ◎歴史・民俗展示室の変遷

50年前の開館当初、1階の常設展示室は、生物・地学展示室(自然分野)に続いて考古・民俗展示室があり、さらに現在の学芸棟入口の史料閲覧室の場所に史料展示室があった(昭和57年度まで)。昭和58年4月1日



展示解説風景(旧石器・縄文)



展示解説風景(民俗)



考古展示風景(弥生住居・石馬)



民俗展示風景(出口付近から復元民家を望む)



(古墳・埋葬)

に、学芸課の係再編成が行われ、旧学芸係の考古・民俗係員と史料係の係員とで新たに人文係が組織された。この時、考古・民俗展示室を歴史・民俗展示室に改編したのである。この折り、「人文系展示の改善方針」として協議された項目は、1. 鳥取県の歴史および民俗の概要を一応理解できるような展示とする。2. 年代は原始時代から近代初め(鳥取県再置)までとする。3. 民俗は近世、現在におよび可能な限り、歴史展示との融合をはかる。4. 展示は第2常設展示室(考古・民俗展示室)とする。5. 改善は57年度より開始し、ほぼ5ヶ年で完了する。であった。以降、鳥取藩を中心とする近世の展示を組み込んで充実させた通史展示は、現在も続いている。

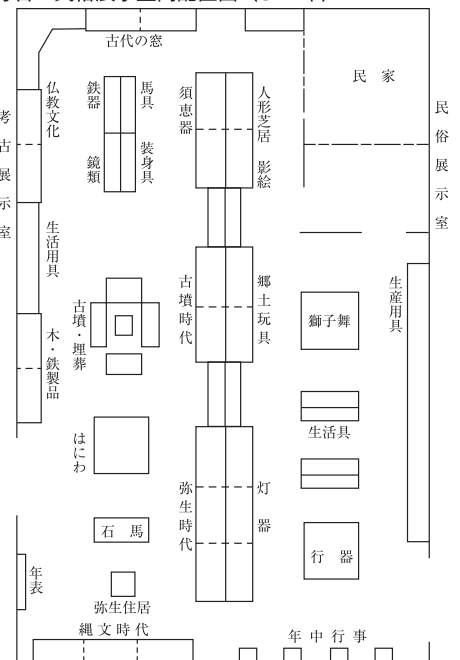
昭和の終盤から平成初期には、情報が古くなった解説パネルを毎年数枚ずつ更新したり、当時のワードプロセッサやコピー機の浸透もあり、補助パネル・キャプションを随時館内で製作していた。一方で、10数年おきには、時勢を鑑みて展示内容の見直し、小規模なりニューアルを行っている。

平成6年度には、解説パネルの規格統一を図り、平成16年度には、コーナー(時代)区分にイメージカラーを設定するなど大がかりな展示室のリニューアルに取り組んだ。そして、平成25年度には展示室入り口と考古分野の展示替えならびに近現代資料展示コーナーを歴史・民俗展示室の出口近くに移動し、平成26年度には歴史(中世・近世・近現代)と民俗分野の展示分野の展示替えを行った。次の課題は美術分野独立後の展示領域の工夫と拡大である。



平成初期の展示風景(上から考古、古代・中世、近世)

考古・民俗展示室内配置図 (S47年)



展示風景(「生活の中の道具」、「伝え継ぐ心」)





区分\年代	開館時	昭和53年頃	昭和終わり	平成前期	平成後期	現在
導入			歴史年表	歴史年表	歴史の窓	歴史の窓
			文化財の分布地図	文化財の分布地図	歴史年表	歴史年表
			歴史の窓	歴史の窓	重要文化財子持勾玉	重要文化財
あけぼの	狩猟と漁労の生活	縄文時代の遺物と生活	鳥取県の原始	狩猟から農耕へ	石器・有舌尖頭器	狩人たちの足跡
			旧石器時代		縄文時代の生活道具	縄文人のくらし
弥生時代	稲作のはじまりと金属文化	弥生時代の遺物と時代編年文化交流	弥生時代		智頭杖田遺跡	土器の使用
					稲作文化の伝来	水田稲作のはじまり
					農耕のまつり	農耕のまつり
					青谷上寺地遺跡の出土品	青谷上寺地遺跡
					「弥生の国邑」妻木晩田	妻木晩田遺跡
古墳時代	古墳文化の発展	古郡家一号墳	古墳とその時代	古墳とその時代	県内の古墳	古墳の出現と前方後円墳
		県内出土の須恵器	古墳時代の社会と生活		銅鏡	密集する古墳
		生活用具	装飾古墳		古墳の副葬品	
			埴輪		埴輪	埴輪
					土師器と須恵器	土師器と須恵器
					子持勾玉	古墳のおわりと横穴墓
古代～中世	仏教文化の始まりと発展				国府	仏教伝来と寺院の造営
			古代の因伯	奈良・平安の因伯	古代寺院	律令国家と因幡・伯耆
			因幡国と伯耆国		上淀廃寺	経塚の造営
			国庁と国分寺		経塚供養	大山寺と三仏寺
			大山寺と三仏寺		大山寺と三仏寺	三仏寺投入堂
			荘園と武士		中世の金石文	鳥取県の梵鐘
			建武の新政と名和長年	戦乱の時代	鎌倉時代	鎌倉時代の因幡・伯耆
			山名氏の因伯支配		南北朝時代	南北朝期の因幡・伯耆
近世	 史料展示室		近世の因伯	士農工商の社会	秀吉の鳥取城攻め	秀吉の鳥取城攻め
			関ヶ原の戦いと因伯		亀井茲矩	天下人と因幡・伯耆
			因州藩の成立と展開			因幡・伯耆の大名たち
			農民と町民		鳥取池田家	鳥取藩池田家
			大山寺の繁栄			池田家の夫人
			近世の産業		城下町	石高からみた鳥取藩
			近世文化の展開		武士の格式と暮らし	鳥取藩の米蔵
			鳥取県の誕生		近世の産物	鳥取藩の紙幣
			鳥取藩と明治維新		近世の大山寺	武士の格式と暮らし
			鳥取県の誕生			城下と自分手政治
			鳥取県の再置			鳥取藩の産物
						近世の大山寺
						鳥取藩と竹島
					因州藩から鳥取県へ	参勤交代
近現代					幕末の鳥取藩	幕末の鳥取藩
						明治時代の鳥取
					鳥根県併合時代	鳥取県の誕生・廃止と再置
					明治期の教育	明治時代の教育
					歩兵四十連隊と日露戦争	郷土部隊の創設
民俗	くらしの中の道具		くらしと道具	生活の中の道具	生活の中の道具	
	住居(復元民家)	復元民家	鳥取県の古民家	復元民家	復元民家	昔の家とくらし
	生産コーナー		生業と道具	稲作農具	明かりの変遷	
	芸能娯楽	漁労と生活	芸能と娯楽	漁労	かすりの製作工程	倉吉餅と浜餅
	伝え継ぐところ		鳥取県の年中行事	伝え継ぐ心	伝え継ぐ心	
	佐治の紙すき	農耕と生活		年中行事	無形民俗文化財	鳥取県の年中行事
	木地挽き	山村と生活		代表的な民俗行事		国重要無形民俗文化財
	人形芝居	和紙と生産		きりん獅子	キリン獅子舞	因幡・但馬の麒麟獅子舞
	きりん獅子			人形芝居	荒神とサイノカミ	サネモリさん
	郷土玩具					荒神さんとクチナワさん
	影絵芝居					サイノカミさん
	日用品				食文化	鳥取県の食文化
	灯器			郷土玩具	郷土玩具	郷土玩具
	年中行事			民俗行事VTR	民具体験コーナー	鳥取県指定無形民俗文化財「ため池における魚伏龍漁」
たる入れ						

### ◎トピック展示の変遷

開館2年目の昭和48年度からは、常設展示室入口、ロビーの一角に新着資料の展示コーナーが新設され、地学・生物・考古・民俗の部門で、新しく寄贈・採集・購入による新着資料が逐次展示紹介された。また、考古・民俗展示室には、時代配列(通史展示)に加え、話題を呼んだ考古資料を展示する「古代の窓」コーナーがあった。最新の発掘調査によって明らかにされた遺跡や新資料の紹介、学芸員の研究発表の場など広範囲な目的で設けられたコーナーは、現在は「歴史の窓」として継続、約2ヶ月ごとに展示替えをしながら運営している。

昭和62・63年度には、開館後初めてとなる全体的なりニューアルが行われたが、この時、音声や映像の展示装置も加わっている。復元民家では、センサーにより鳥取県民謡緊急調査報告(昭和62年)の成果である民謡を自動で流す音声装置を設けた。また、それまで8ミリフィルムやVTRによる映像記録を撮りためていたが、民俗行事を番組として編集したものをビデオテープ(ベータ)で視聴者が選択し鑑賞する機械を設置したのもこの時である。その後も毎年民俗行事を撮影して編集する事業は平成年間まで続き、ビデオテープからレーザーディスク・DVDと媒体を替え、デジタルの現代はホームページ上(鳥取県の民俗行事等)で閲覧できるようになっている。



「古代の窓」展示風景(昭和50年代)



「歴史の窓」展示風景(平成前期)



同上。左側には復元竪穴住居模型、旧年表と文化財分布地図が展示されている



「歴史の窓」展示風景(上：平成後期、下：R5年)

平成の展示替えでは、体験参加型展示装置として、考古分野では土器パズルと短甲模型の試着、近世分野では鳥取県域の歴代支配大名を色分けした領地パズル、民俗分野では民具(竿ばかり、唐箕)を使ってみようという体験コーナーを設けたが、令和時代になり、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため撤収している。